

# アメリカ留学体験レポート

情報文化学科

2年

川田浩子

私は8月20日から12月13日までの約4ヵ月間、アメリカ留学を体験させていただいた。お世話になった学校は、Northwest Missouri State university という大学である。これから私がアメリカの地で体験したことを良かったこと、学んだこと、感じたことを含め述べていこうと考える。

最初に、準備について述べる。アメリカという見ず知らずの国で親元を離れ英語を学びに行くということに気を取られて、準備段階を全く考えずに留学を決めたため準備に取り掛かってからは怒涛であった。パスポートや入国査証（ビザ）、SEVISや海外保険等の申請管理、キャリアケースやクレジットカードの準備、アメリカに合った現地に必要な物等を6月あたりから8月の間に、先輩方のアドバイスなどをもとに両親や教職員の協力の元進めた。

不安と興奮が入り混じりながら最初の1か月を過ごしていたが少しずつ慣れて行き、人類の言葉ではないように思っていた英語も少しずつ自分の耳で聞き取れるようになり手ごたえを感じるようになっていた。課題に出る単語のテストもスピーチの暗記も私にとっては難しいもので苦しめられたがそれが段々と回を重ねるうちに楽しくなっていった。スピーチは練習しただけスムーズな英語が出てくるようになる。今まで単語を覚えるのが苦手だったが先生が紹介してくれた覚え方だと頭への入りやすさが違う。今まで発見できてこなかったことが見えてきた。これらのことは日本に戻ったこれからも続けていきたい。またこのように学びや新たな体験に集中できたのも、遠く離れた友達や家族からの普段と変わらない連絡のやり取りも心の支えにもなっていたと感じた。

クラスメイト達とはより近い関係だったと感じる。クラスメイトには中国人と韓国人がいた。会って間もない頃は考え方などどの程度違うのだろうと考えていたが、授業やそれ以外の時間を共に過ごしていくうちに日本人とさほど変わらないと感じた。面白いハプニングが起きたりすると笑うタイミングが同じだったり、それぞれの国の癖で英語を話すので聞き取りにくい場面もあるがそれもお互い察したりしながら打ち解けることができた。話す言語が違うだけで同じ人間だということを、身をもって感じた。それはアジア圏と欧米圏の多少の差はあれどもアメリカ人にも言えることであった。



留学プログラムの一環として、1日1時間現地の大学生と日本人2人の、一組で会話をする機会がある。それを週2回4か月間つづける。私たちのConversation PartnerはMelanieという年上の女の方だった。彼女は一言でいうととても明るく笑顔が印象的な可愛い人で、話が面白く心配りが上手でとにかく素敵で尊敬できる人であった。時には原子力の問題など真面目な話をするときもあり、翻訳に時間がかかることもあったが嫌な顔せず待ってくれて、さらに翻訳を手伝ってくれた。

ルームメイトが日本人で授業以外ではあまり現地の人と定期的に接することのなかった私にとってこのConversationの時間は非常に大切な時間になった。彼女との会話のなかで聞き取りの成長を一番実感できる時間であり会話力や足りない点を確認できる時間でもあった。

欧米ならではの挨拶のハグはThanksgivingの日とお別れのときに体験した。Thanksgivingの際お世話になったSherry夫妻は、また来てねと軽くハグをしてくれた。優しさや暖かさは感じたのはもちろんなのだが、それまでアメリカではハグの往来を想像していた私はこんなものなのかと以外にもあっさりしている印象を受けた。しかし卒業を終えお別れの際に先生から力強いハグをしてもらった。またその後もConversation PartnerであるMelanieに日本のお土産とお世話になったお礼を手渡した際、一瞬動きを止めて泣きながらハグをしてくれたのだ。まさか泣くとは思っておらずその場にいた私たちも感極まり泣きながらハグをした。文化を感じたと共に心が一つになった思いであった。

